



福竜丸だより

2009.09.01
No.353

(9・10月合併号)

発行：財団法人 第五福竜丸平和協会 連絡所：東京都江東区夢の島3-2 〒136-0081 第五福竜丸展示館内

Tel.03-3521-8494 Fax.03-3521-2900 E-mail:fukuryumaru@msa.biglobe.ne.jp URL http://d5f.org



7月20日、マーシャル諸島の核被害を報道したジャーナリストによる報告をうける
写真提供・吉川繁氏

2009年夏の展示館から

マーシャルの子どもたちに 思いを寄せて

夏休み期間の第五福竜丸展示館には、連日高校生や中学生が課題のレポートのために訪れ、また親子連れの小学生も数多く来館し、ボランティアの話に聞き入る姿も見受けられました。

今夏の「子どもワークショップ」は、七月二十五日、八月二日、九日に『水爆の島マーシャルの子どもたち』の写真絵本の読み聞かせと工作教室「牛乳パックでつくろう第五福竜丸」がとりくまれ、読み聞かせには四〇人余の親子連れが参加、工作には一〇人ほどが参加しました。

七月二〇日には展示館のイベントとして、七〇年代にマーシャル諸島を取材し、核被害、被ばく者のことを日本に伝えたジャーナリストが集まり、取材体験などを語る会が開かれました。報告は、島田興生さん(フォト・ジャーナリスト)、岩垂弘さん(元朝

日新聞記者)、斉藤達雄さん(元共同通信記者)、前田哲男さん(フリー・ジャーナリスト)、豊崎博光さん(フォト・ジャーナリスト)の五人です。

この催しは、島田興生さんの写真絵本『水爆の島マーシャルの子どもたち』復刊を記念して開かれました。一九七〇年代までほとんど伝えられていなかったビキニ事件のもう一つの被害であるマーシャルの被害についての報道にまつわるエピソードなどが披露されました。会には五〇人が参加、終了後には、展示館横の小さな庭で懇親会が開かれ、賑やかな話の輪ができました(2めん〜5めん)に報告の要旨を掲載)。

写真絵本の普及とあわせて、島田さん撮影の「マーシャルの子どもたち」の写真パネル一〇点が久保山愛吉さんの命日、九月二三日まで船首の側に展示されています。

マーシャル核被害を伝えたジャーナリストたちの報告より

(文責編集部)

忘れられない人たち

島田興生(フォト・ジャーナリスト)

私が初めてマーシャルを訪れたのは一九七四年で、七八年に写真集『ビキニ マーシャル人被曝者の証言』(JPU出版)を出版しました。八五年、九一年にはマジユロ島に住み、取材と交流をつづけました。

一九九四年に第五福竜丸展示館で、ビキニ事件四〇周年の写真展を開いたとき、来館者の中に子どもが多いことに驚きました。ここにはマーシャルに関する展示もあります



島田さん

が、やはり、子どもたちの関心は第五福竜丸の被ばくで止まってしまふのではという気がしました。

そこから先を見つめてもらいたいと思い、二年間かけて『水爆の島 マーシャルの子どもたち』(福音館書店)たくさんのふしぎシリーズ)を九六年に写真絵本として出版しました。あれから一三年経ち、現地でもさまざまなことがありました。

ロンゲラップの人たちは、被ばく後島に戻ってから二五年経った一九八五年、島を脱出しました。そのときのリーダーで国会議員だったチエトン・アンジャインさんは、九三年に亡くなりました。〇四年七月には、被ばく時に村長だったジョン・アンジャインさんが亡くなりました。彼は七二年以来、四回来日、マーシャルを訪ねたジャーナリストのほとんどがジ

ョンさんにお世話になってい、とても魅力のある方でした。〇六年一二月には弟のネルソン・アンジャインさんが亡くなりました。彼は毎年のように来日していたのでお会いになった方も多いと思います。

ジョンさんの亡くなった後、村のリーダーは若い人に代わり、アメリカから補償金をいくら引き出すかという点に重点がおかれ、被ばくの体験を伝えるのが少しなおざりになってしまった。それは仕方ないですが辛いような感じがします。

私はマーシャル滞在中は、「民泊」をさせてもらいながら、ロンゲラップの被ばく者に会います。リミヨ・エボンさんの家には毎回泊めてもらっていました。リミヨさんは元教師で、被ばくにより両親と妹を亡くし、ご自身も後遺症に苦しんでいます。

〇六年に行ったとき、最後の日に記念写真を撮ろうといふと、彼女はまるまると太った若い男の子をすぐそばにひきよせ、ものすごく幸せそうな顔をしたんですね。あんな

にも晴れ晴れとした顔を見たことはなかった。その時、二五年前の一九八一年に撮った一枚の写真を思い出しました。ロンゲラップから脱出する前、リミヨさんが庭で赤ちゃんを抱いている写真です。

その子が二五歳になっていたのです。その表情からリミヨさんが何を大事にしていたかが、ひと目でわかりました。

リミヨさんは、とにかく生活すること、子どもや家族を守ることに全精力を費やしてきました。時にはアメリカの高官の前でも堂々と批判を言いますが、一人の母親として穏やかさ、芯の強さを持ち、自分たちが健康に生き続けることで気持ち表現しているのだと思います。

〇七年に訪ねたときにリミヨさんの夫タリネスさんや息子のジャマイ君から聞いたロンゲラップの被ばく者の現状が、写真絵本復刻のもうひとつの理由です。

一九八六年に、マーシャルはアメリカと自由連合協定を結び独立した際に、被ばく者への補償が約束されました。しかし、〇三年にこの協定が

改定された結果、補償がなくなり医療費は自己負担となりました。リミヨさんが毎日飲む甲状腺治療の薬代も全部自費で、経済状況はとも厳しいと言います。話ながらタリネスさんは息子の頭のマッサージをするのです。この子にも後遺症がある、と言いながらマッサージを続けました。

経済的な問題はありながらも元気に過ごしている、健康な若者だと思っていただけにショックでした。彼女にも家族にも、被ばくの被害が今も続いている、何かもう一度できることはないかなと考えるようになりました。

この写真絵本は一三年ぶりの復刻です。一三年というのは小学五年生だった一読者が大学を卒業し就職する年月です。そしてこの期間に、第五福竜丸のこともマーシャルのことも小学生の授業ではほとんど触れられなくなっています。そんな「空白」を埋めるためにも、新しい読者にも知ってほしい、今後は英語版を作ってマーシャルの被ばく体験を世界に発信していけたらと願っています。

最初の調査団に 参加して

岩垂弘（ジャーナリス
ト・元朝日新聞編集委員）



岩垂さん

私は、一九七一年一二月にマーシャルに参りました。しかし、被ばく地のロンゲラップ島、ウトリック島などの現地に入って取材をすることはできませんでした。

五年前の水爆実験では、西風が吹いて東の方に放射能が流れ、マーシャルの住民や乗組員が被ばくしました。当時第五福竜丸のことは非常に大きく取り上げられ、原水爆禁止運動を生み出していくのですが、現地の住民が被ばくしたことはあまり日本では知られなかった。というよりも報道されませんでした。被ばく直後五四年六月にAP通信が記者を現地に派遣して報じましたが、その後途絶えて忘れられていくわけです。

日本でマーシャルの被ばく問題に関心が集まったのは、被ばくから一七年後、七一年八月に原水禁国民会議の原水爆禁止世界大会に、ミクロネ

シア議会下院議員アタジ・バロスが来日し、初めて現地の被害について、具体的に日本の国民に明らかにしてからです。画期的な出来事だったと思います。

原水禁はその年の一二月初旬に調査団を派遣します。大変早い対応でした。団長は、当時原水禁の役員で医師の本多喜美さん。のちに第五福竜丸保存運動の役員にも就かれ、協会理事もなさった方です。事務局は池山重朗さんで、企画・実施の中心メンバーでした。この人がいなければ実現しなかったと思います。専門家としては、広島大学原爆放射能医学研究所の江崎晴男教授。この調査団六名に加え、中国新聞、毎日、朝日、共同通信の四社が参加しました。

一二月六日に日本を発ち、グアム経由で当時のミクロネシアの中心地だったマジュロ島に入り、そこから船でロン

ゲラップ、ウトリックに渡るうという計画でした。

ミクロネシアは戦前、日本が植民地化していた「南洋群島」です。当時はアメリカの信託統治領だったため、我々が調査するにあたって、アメリカの許可が必要でした。学術調査の許可がおりのわけもなく観光ビザで行きました。ところがマジュロに着いたところ、入国許可が出ておらず不法入国だ、次の飛行機で帰りなさいとアメリカから通告を受け驚きました。飛行機はすでにハワイに向けて飛んでしまっている。結局マジュロに滞在して帰国を待ったのですが、その間に可能な限り情報収集や取材をしました。

マジュロでの取材は許可がおりませんでした。「隠密行動」で、ロンゲラップ島から来ていた被ばく者一四人と会い、聞きとり調査ができました。日本の平和団体が初めて現地の被ばく者と接触した機会でした。

現地の方々もいろいろ動きました。当時マーシャルのトップにいたアマタ・カブア（のちのマーシャル初代大統領）

常任委員長がアメリカ政府と交渉して、入れるようにと働きかけてくれました。アタジ・バロス議員も、日本の調査団を入れなければ、コナード博士を中心とするアメリカの医療調査団を拒否する、とまで迫って接衝した。この医療調査団というのは、アメリカが水爆実験のあと定期的に被ばく島民の健康調査をするために現地に送り込んでいた調査団のことです。

今思い出しても、非常に怖い記憶があります。グアム島についた時からなにかおかしいんですね。われわれを見張り、尾行している者がいる。飛行機にも一緒に乗ってくる。それは一種のCIA的なアメリカの機関の者で、見張りのようなものだったのではないかと思えます。マジュロ島では空港近くのホテルにほとんど監禁状態だったので、めしを食うにも、ロビーにもすぐ近くに機関の人が尾行していて非常に気味の悪い一週間でした。アメリカが

いかに調査団を警戒して、被ばくの実情を知られたくないか、という表れだったのでし

よう。しかし、危険と困難を顧みず果たした役割はひじょうに大きかった、日本の人々にマーシャルの被ばく問題を伝えた、認識させたことは大きかったと思います。

ホノルルからマ
ーシャルへ
斉藤達雄（東北公益文
化大学教授・元共同通信
記者）

私は当時、共同通信のホノルル特派員でした。一九七一年、ロンゲラップ、ウトリック、ピキニに行ってみたく、思っておりました。もともと、サラリーマンでしたから、暇もなく、勝手には行けません。岩垂さんの書かれた、七一年一二月一九日の朝日新聞の記事を読み、マジュロに行けばとにかく被ばく者と会えるのだと教わったのです。大変貴重な情報でした。

ホノルルにはミクロネシア独立運動にかかわっている人たちの住むミクロネシアハウスがあり、そのサロンの壁に、「第五福竜丸保存運動」のポ
（4めんにつづく）



斉藤さん

スターが貼ってありました。アタジ・バロス議員が日本から持ち込んだものです。その余白に英語で「あの実験のため何百人ものわれわれマイクロネシア人は被ばくしたのだ」と書きこまれていました。この言葉が、私が、広島・長崎、第五福竜丸以外の被ばく者を目を向けるようになったきっかけです。アタジ・バロスには、間接的な影響を受けたこととなります。

七二年二月、私ようやくマジュロに行きました。その頃ニクソン米大統領が訪中し、米中国交回復にむけて動いていた。私がホノルルから何を書こうか載らない。

マーシャルでは、ジョン・アンジヤインさんから話を聞くことができました。

朝日新聞の土井全二郎さんは七三年〜七四年にビキニ島を取材しレポートを発表しました。彼はビキニ島三か所の

砂のサンプルを日本に持ってきました。これをしかけたのは実は私なんです。私はマーシャルに行っても、ビキニに行く日程が取れない。二、三日の滞在ですぐにホノルルに戻らなければなりませんでした。そこでジョン・マーフィーにビキニの砂を日本に持っていくたいと頼みました。彼は元「平和部隊」のメンバーで、マジュロ在住のアメリカ人。現地新聞「ザ・マイクロニタ」（現在「マーシャル・アイランズ・ジャーナル」の記者です。

それから一、二年後に彼が土井さんに頼み、土井さんが持ち帰ったのです。『マイクロネシア』（すずさわ書店、七五年）にも書きましたが、放射能がかなり強烈に残っているという結果が出ました。

マーシャル語の通訳でお世話になります。七四年に私がマジュロへ行つた時、具志さんは被ばく者の面倒をみていました。彼に通訳してもらい被ばく者の声を聞くことができるようになりました。生まれてきた子どもに六本の指が

あるということなども知り、ショックでした。

その後島田さん、前田さんの取材があり、さらに豊崎さんが世界の核被害へと視点を広げていきました。近年若い世代の研究者が島田さんたちの助言もうけて、ロンゲラップ、ウトリック以外の島の被ばく問題を明らかにしてきました。われわれがたどりつかなかった別の島に行つて被ばくの事実を明らかにしています。また文化人類学の見地からの調査も行っており、マーシャルの研究は継承され広がりをみせていることを嬉しく感じています。

ロンゲラップの被ばく者

前田哲男（ジャーナリスト・沖縄国際大学客員教授）

第五福竜丸の下でお話する機会を得て、ある臨場感を感じています。私が島田さんと一緒に一九七四年七月にロンゲラップに行つたときに乗つたのは、これより少し大きな「ヤップアイランダー」とい

う船でした。この第五福竜丸とロンゲラップ島は、五四年三月一日に約四〇キロの距離を隔てて被ばくしたことになります。福竜丸乗組員はロンゲラップを知りませんし、ロンゲラップ島の人びとは福竜丸を見ることはありませんでした。同じ光に曝され、同じ死の灰をあび、同じ被害を受けながら、つきはなされて遠く置かれていました。

われわれは最初からビキニに行くのが目的ではなく、ロンゲラップにどんな人がいて、どんな体験をしたのか知りたかというのが目的でした。

当時は、マーシャルの人々が現金収入を得るコブラ（ヤシの果肉を乾燥させたもの）を集荷するために島々を回る巡航船がありました。その船が、マーシャル北部のロンゲラップに立ち寄るタイミングを捕まえるしかありません。こちらの都合は一切きかない。



前田さん

そういう「船待ち」をしながらロンゲラップに着きました。次の集荷船が来るまでの四週間は、恵まれた取材環境でした。このときの取材は『棄民の群島』（時事出版 七九年）などにまとめました。

そのとき私が取材したのは一六人から一七人。一か月間にそれだけインタビューすればいいわけで、こんな楽なこととは無い。通訳はアリック・ケンラクという、戦時中ポナペ島で通訳をしていた人でした。当時被ばくから二三年。みなさん壮年から初老で、まだ記憶が明晰でしっかりした声で語ってくれました。

いくつか難しい点がありました。年齢と名前がはつきりしないということです。これはAEC（アメリカ原子力委員会）が最初に直面した問題でもあったようです。戸籍がありませんし、何年生まれかわからない。名前はRやHを省略して発音される。家族構成表や系統図を作ってみてもわからない人がでてくる。これら突き止めていくのは大変興味深かった。

もう一つ滞在中にわれわれ

が見つけたのはカルテです。AEC調査団が島の人々の健康の追跡調査を年に二度おこなっています。われわれが滞在したときにヘルスイドという、医師ではないが常備薬を管理している島の人が、そのカルテを持っているということで見せてもらった。手書きの英語ですから、所見のところはとてではないが読めません。島田さんが全部一枚一枚写真に撮りました。そこにはAECがロンゲラップ在住の被ばく者の名前と彼らが苦心して確定させた年齢と被ばく後の所見、病歴と現在の健康状態が記録されています。その中の一人、島に就いて三日目に亡くなったナポタリ・オエミさんのカルテに記載された最後の病歴は胃がんと言うことでしたが、妻のセラさんが彼の最後の言葉として周囲にもらしたのは「私は爆弾のために死ぬんだ、このことをみな忘れないように」ということでした。



豊崎さん

軍が記録したロンゲラップの被ばくの実態を伝えるものとして存在しつづけるだろうと思います。

マーシャルと核の世紀を追う
豊崎博光（フォト・ジャーナリスト）

私がマーシャルの取材をするきっかけは、「ビキニーやはり死の島。島民の再移住を準備」という朝日新聞の記事（一九七八年三月二〇日）です。マーシャルへ行く前に島田さんや前田さん、斉藤さんの本を入手し、斉藤さんを訪ねて助言を受けました。

サイパン経由で夜中にマジュロに着き、翌日港に行ったらもう船は出た、ほとんど船長まかせで行ってしまおうという。結局「船待ち」を三〇日間することになりました。そのときマジュロ在住のロンゲラップの人、ヒロコさんに会いました。彼女がロンゲラップ島の被ばく者を紹介し案内してくれました。

ある晩飛行場へ行くと飛行機から高等弁務官エイドリア・ウインケルがAECの連中と一緒に降りてきた。彼らは翌日、マーシャル諸島政府の役人を集めて説明をしました。ビキニーには住めないという最後通告をしたのです。

マジュロにいるビキニーの人たちがこの件を移住しているキリ島に伝えるために、特別に船がでるといので私もその船に乗っていきました。それがビキニー取材の始まりです。このときだいたいの話をついたものの、いつ移住を始めるかの最終決定はしないということでした。

五月の初旬やつとビキニーに行く船がきました。夕方就航したが、翌朝船の向かってる方向が違う。聞けばヤルトで座礁した船を助けるといのですが、結局引き上げられず、乗客と荷物を私たちの船に積み替えて、ヤップとイボンという私にとっては予想だにできなかった島を回っ

て、やつとクワゼリン環礁イバイ島に戻ってきました。そこから本格的にコースに入るわけですがロンゲラップ、ビキニー、エニウエトク、エニウエトク環礁の人たちが移住させられたウジェラン島まで行って帰ってくるという三八日間の航海をしました。病人の収容などもあり、あまりにも長期に航海したため食糧がなくなり、命からがら帰ったといのが最初です。帰ってきてもビキニー移住の話は始まりませんでした。

その頃、ミクロネシア全体が信託統治領制度が終わったあとの国のありかたを問う住民投票のために激しい選挙戦のさなかでした。マーシャルでは、「ミクロネシア全体として一緒にやろう」というユニティー（統一）派と、「われわれは独立する、マーシャルはマーシャルだ」というセパレート（分離）派が激しく争っていました。

選挙と投票結果が出るまで滞在し、一時帰国してビキニーの人たちの移住が決まった八月初めに再びマーシャルへ。七八年はほぼ一年マーシャルにいたことになりました。そういうことをきっかけにずつとマーシャルの取材を少しずつ進めていきました。ジョン・アンジヤインさんやロンゲラップの人たち、あるいはほかの島の人たちとも緊密に連絡をとりながら取材をさせてもらい、「マーシャル諸島 核の半世紀」（日本図書センター 〇五年）にまとめました。

最近では、二〇〇六年三月と四月にNHKのBSの取材で行きました。その時にヒロコさんとお姉さんのリミヨさんに話を聞いたのですが、残念ながらヒロコさんは去年亡くなりました。当時八二人プラス胎内被ばく含めて八六人が被ばくしました。

ヒロコさんは五三人目の犠牲者です。もう七〇パーセント以上の方が亡くなっています。いま生存されている方は被爆当時一歳とか三歳とかかなんですね。ほとんど被ばく当時の記憶がないのです。そういう意味で「三・一」実験被害の生々しい記憶というのは薄れているのではないかなと思います。

私と「マーシャルの子どもたち」

土屋 茉奈

私がこの写真絵本『マーシャルの子どもたち』と出会ったのは、今から一三年前、小学五年生の頃でした。きれいな写真に魅かれて何気なく手にとった本には、水爆実験のことが書かれていてとても驚いたのを今でも覚えています。

初めて触れた「外国」

『マーシャルの子どもたち』は私にとって初めての外国を知る機会でもありました。世界にはいろいろな国、いろいろな人がいるということ、水爆実験の被害で今もなお苦しんでいる人がいるということを知り、何か私にもできることがないか、考えるようになりました。

この本を読み、同じくらしい年ごろのマーシャル諸島の



子どもたちの暮らしや水爆実験の被害を知り、とても強い衝撃をうけました。このことを本の作者である島田興生さんに伝えたい、そしてマーシャルの子どもたちにも自分の感じたことを伝えたいと思うようになったのです。

島田さんに手紙を出したところ、「水爆実験のことやマーシャルの島の人たちに関心を持ってくれてとてもうれしい、一番喜ぶのはマーシャルの島の人たちでしょう。」と返信をくれ、マーシャルの子どもたちに手紙を書きたいということを応援してくれました。それだけではなく、二か

月後マーシャル諸島に行く時に、手紙を持って直接届けてくれると言ってくれました。

マーシャル諸島のメジャト島の小学校の校長先生（リミヨ先生）宛てに書いた手紙には、この本を読みマーシャル諸島のことを知ったということ、そして感じたこと、放射能の被害はありますがどうか頑張つて生きてほしい、ということを書きました。

メジャト島には郵便局がなく手紙がちゃんと届くかわからない、ということでしたので、数ヵ月後マーシャルから返信の手紙が届いたときはとても驚き、とてもうれしかったです。

返事を書いてくれたのはリミヨ先生の生徒であり、姪でもあるポミナという女の子でした。「私たちに興味を持ってくれてうれしい、今でも多くの人が放射能によって病気になるっている」ということが書かれています。

みんなに知ってほしい

島田さんとはその後も文通が続き、今もなお連絡を取り合っています。島田さんは今のマーシャル諸島の現状をは

じめとし、さまざまなことを私に教えてくれます。そんな島田さんと今年の一月に初めてお会いしました。会ってみて、私がこの本にとっても魅かれた意味がわかったような気がしました。

島田さん夫妻はとてもあたたかく、愛をたくさん持っている人でした。マーシャル諸島の人たちに対する思いもあつく、あたたかかった。そんな方が作った本だからこそ、私は魅力を感じたのかもしれない、と思ったのです。

本を読んでとても心が動かされた事、島田さんとマーシャルの人たちとの出会いは私にとってとても大切な出来事です。何か節目があるごとに私はこの本や島田さんとマーシャル諸島からの手紙を読み返してきました。これからの自分の進む道を考えるとき、過去に強く心を動かされた経験がなにかヒントにつながるはずだ、と思うからです。この本も、島田さんやマーシャル諸島から届いた手紙も読み返すたびに私にメッセージがくれます。この本と、この本がくれた出会いをこれからも

大切にしていきたいと思えます。

一三年ぶりにこの本が復刻されました。多くの人が手に取り、マーシャル諸島で起こった事実を知り、何かを感じてくれたらうれしいです。

（つちやまな・マーシャルの子どもたち55プロジェクト事務局）

第五福竜丸賛助会員や読者のみなさまのご協力で、現在『マーシャルの子どもたち』は、300冊余が普及されました。各地で開催された平和のとりくみでも紹介されています。

長崎で被爆された方、平和学習を勧めている教員などから激励のお便りをいただきました。また、以前マーシャルで調理師をされ、現在自身が経営している居酒屋にリーフレットを置いてくださっている方、地域の図書館に購入をよびかけてくださっている方など、多くのおみなさまのお力添えでプロジェクトは進行中です。心より感謝申し上げます。ひきつづき、周りの方や図書館・学校などへお勧めください。

貧困な原爆被爆者対策と対決する被爆者の原爆症裁判の闘い

その到達点と課題

池田眞規

八月六日、日本被団協（原水爆被害者団体協議会）と麻生首相との間で原爆症認定裁判の終結にあたり確認書を取り交わしました。この裁判の問題点は、被爆者援護法により被爆者が国の負担で原爆症の治療などを受ける場合の認定が厳しく、原爆症に認定されるケースが極端に減らされ、認定率は被爆者の1%以下という実態が問題になったのです。

そのやり方は、「原爆放射線の人体への悪影響は爆心地から二キロまで」という原爆被害の実態を無視した認定基準を採用したためでした。そこで二〇〇三年に、被団協と弁護団が、認定を却下された全国の原爆被爆者たちと呼びかけた結果、被爆者たちが全国各地の裁判所で「認定却下を取消せ」と裁判を起こしたのです。

弁護団と原告団は、全国連絡会をつくり、訴訟準備をして、法廷では原爆被害の実態の証明に全力を挙げました。約三年にわたる審理を経て、〇六年五月の大阪地裁の勝訴判決を皮切りに〇九年八月三日の熊本地裁判決まで実に三年間のうちに全国の地裁・高裁において一九連勝をする成果を挙げました。

これと並行して、原告団と弁護団は今年に入り、国会議員の協力を得て、全国の訴訟の一括解決を目指して政府交渉を開始し、遂に八月六日、広島で日本被団協と麻生首相の間で訴訟の終結に関する基本方針の確認書を取り交わすに至ったのです。その内容は、一番勝訴原告をすべて原爆症と認定する、敗訴原告の救済のために基金を創設、認定制度の改善の協

議機関を設置、などで訴訟を終結するというものです。

これが現在の到達点です。これは政治的な力関係では一杯のところかも知れませんが、従来の許し難い不合理な認定制度の運用実態から見れば大きな前進であり、その限りでは勝利と言えましょう。

しかし、この程度の到達しかできない理由は、政府が日本の安全を米国の核の傘に依存する外交方針が、大きな障害になっているのです。

政府の被爆者援護対策は「原爆被害は戦争被害だから受忍すべきもので、国は被爆者に対して国家補償をする義務はない」というのが原則です。今回の確認書ではこの原則の変更はありません。これは米国の核の傘依存の政策と不可分です。

原爆症訴訟で被爆者と弁護団が最も苦しんだのは、認定に必要な「原爆症と原爆放射線の因果関係の証明」でした。被爆者の要求である国家補償の立場に立てば、被爆者いじめの認定制度は大幅に見直しとなります。核兵器は国際法

に違反で廃絶すべきだ、という立場に立てば、核兵器の犠牲者の被害は国家が補償することになります。だから、原爆症認定訴訟の闘いとは、核兵器廃絶運動と国家補償の要求運動という日本被団協の基本要求の闘い一環なのです。

原爆被爆者の基本要求的運動は、米国の核の傘から離脱する運動、日本国民の核兵器廃絶運動、戦争に反対する憲法九条を守る運動などと完全に連帯する運動でもありません。このような運動が核兵器のない世界を実現し、人類が核による絶滅から生き残る道だと思えます。

被団協五〇年史のこと

完成した日本被団協五〇年史は人類にとり永久の宝です。

人類の絶滅をもたらす核兵器の最初の犠牲者である原爆被爆者たちは、一九五六年八月、日本被団協を結成し、そこで「私たちは自らを救うとともに、私たちの体験をおして人類の危機を救おうという決意を誓いあった」と宣言し、それから半世紀にわたり、



被団協 50年史

心と体の苦しみにさいなまれながら、世界に被爆の実相を語り「ふたたび被爆者をつくるな、核兵器をなくせ、戦争のない世界を」と訴え続けてきました。人類史において、このような倫理性の高い戦争犠牲者の闘いがあったでしょうか。

その闘いの「五〇年史」は、被爆者たちの命がけの闘いの歴史です。それは、人類が終末を迎えるその日まで、核を知った人類が生き残るための道を説いた「永遠の経典」であり「人類の宝」であり続けることは間違いないでしょう。（いけだまさのり／原爆症認定集団訴訟弁護団長）

◇日本被団協五〇年史、本編・資料年表編の2巻B5版755頁、あけび書房、12600円

夏空のもと反核マラソン



8月1日、展示館の前から2009年核兵器廃絶平和マラソンがスタートしました。新日本スポーツ連盟東京のよびかけで代々木公園のゴールをめざし80名が参加、「一日も早く核兵器のない地球に」のゼッケンを胸に走者が勢ぞろい。第五福竜丸平和協会からは奥山修平理事が激励の挨拶とスタートの号砲を鳴らしました。

第五福竜丸の曲を演奏する高校生

埼玉県の春日部共栄高校吹奏楽部員57人が7月3日に来館しました。同校吹奏楽部は、今年度の全国大会参加の自由曲に委嘱作品の「ラッキー・ドラゴン～第五福竜丸の記憶」(作曲・福島和弘)でのぞみます。この曲を演奏する学習のための見学でした。安田和也学芸員から船の歴史、時代背景、核軍拡競争、久保山さんの死などについて説明をうけ熱心

に聞き入り、時間を掛けて館内をまわりました。全国大会は10月に東京でおこなわれ、いまは予選地区大会が開かれています。なお、同曲は5月の吹奏楽部定期演奏会で初演され、CD化されています。

久保山さんのひ孫、めいちゃん来館

被ばくから半年後の9月23日に亡くなった無線長・久保山愛吉さんのひ孫にあたる菅原めいちゃん8歳が両親と一緒に来館し、展示館スタッフと懇談しました。菅原さんは、久保山さんの三女さよ子さんのご子息で、「船が傷んでいるのではないかと気がかりで来館した」と語りました。めいちゃんは、「ひいおじいちゃんは船にのっていた(ほかの)人よりも早く死んじゃったから、ばあばはかなしい思いをしたんだね。ひいおじいちゃんは、お星さまになって見まわってくれるといいな。そうすれば、ばあばもきっとよろこぶね。二どとせんそうがおこらないように。平和をとってほしい」とのねがいを書いてくれました。

久保山さんのカルテみつける

7月19日の時事通信の配信によると、久保山愛吉さんの闘病中のカルテが、入院していた国立東京第一病院、現在の国立国際医療センター戸山病院の保管庫から発見され、13日に同病院木村壮介院

長により発表されました。

同院長は、「貴重な資料なので病院で永久に保存したい。遺族の理解が得られれば、死因などの検証のため、研究所に貸し出すことも可能かもしれない」とコメントしています。

資料を寄贈いただきました

第五福竜丸、ビキニ事件に関する以下の資料が寄贈されました。

*海洋生物の研究者として、俊鷗丸海洋調査の顧問団で東大の檜山義夫教授(元第五福竜丸平和協会理事)の資料が、東大水産学研究室の青木一郎教授より寄贈されました。

*東京大学生協の元職員、高橋晴雄さん、広瀬なかさんから、東大病院に入院していた第五福竜丸の乗組員を慰問したエピソードをうかがい、レクリエーションで外出した折の写真が寄贈されました。当時、単調な入院生活で退屈した患者たちを慰めるため、東大病院の主治医から頼まれて病室を訪ねたり、外出を企画したとのことでした。

*船大工の道具箱が寄贈されました。千葉県市原市の大崎一郎、史子さんから、父親で船大工の倉本恭一さん作製の道具箱が寄贈されました。倉本棟梁は、和歌山県の新宮造船所で木造船建造に従事されたそうです。

ありがとうございました。

特別展 黒田征太郎さんの第五福竜丸とピカドン作品(核兵器廃絶をめざすヒロシマ・ナガサキ議定書)の展覧会

いま核兵器のない世界へとさまざまなうごきがおこるなか、黒田さんは、ビキニ・福竜丸・久保山さんに思いを寄せて作品50枚を描き、先ごろ平和市長会議の提案した核兵器廃絶を求めヒロシマ・ナガサキ議定書を絵本に仕上げました。ビキニ・福竜丸とヒロシマ・ナガサキの初公開の作品の絵画展です。ビキニ55年からピカドン65年へとつなぎます。

◇11月14日(土)～2010年3月22日まで 入館無料

◇オープニング企画 11月14日14:30より黒田さんと核廃絶のメッセージを描こう

◇場所 第五福竜丸展示館内

◆9月23日・久保山忌◆

故久保山愛吉さんの55回目の命日にあたり、平和を語る集い、句会、マグロ塚の会、東京原水協見学学習会などが開かれます。

